

西川如見と清代儒学

柳 沢 南

まえがき

西川如見（一六四八年——一七二四年）は、息子の正休（一六九三年——一七五六年）とともに、長崎の天文・地理の学者でありかつ朱子学派の儒者でもあった。天人合一・理気合一の儒学思想の⁽¹⁾もとで、如見・正休の父子は、〈命理〉の天学と〈形氣〉の天学を綜合し統一しようとした。自然と人間を対象とする認識において、〈命理〉の天学とは哲学であり、〈形氣〉の天学とは科学であった。如見は正休とともに、この自然と人間をめぐる哲学と科学を綜合し統一しながら、古代と近世、東洋と西洋を比較・対照した。

ところで如見・正休の〈命理〉と〈形氣〉の綜合し統一は、向井元升（一六〇九年——一六七七年）の〈窮理〉と〈器数〉や三浦梅園（一七二三年——一七八九年）の〈条理〉と〈実測〉の綜合し統一に主旨が一致しており、さらにこれら如見・正休・元升・梅園の哲学と科学の綜合し統一が清代儒学の『物理小識』（方以智著）や『天経或問』（游子六著）の〈通幾〉と〈質測〉あるいは〈条理〉と

〈象数〉の綜合し統一に趣意が近似している。しかもこれら哲学と科学の綜合し統一が論理のうえでも歴史のうえでも系譜として接続していることを以下に立証したい。

なお『西川如見遺書』（西川亮編）『文明源流叢書』（国書刊行会編）『梅園全集』（梅園会編）『物理小識』（国学基本叢書二四六）などから文章を引用したが、傍点は原文にはなく、筆者が便宜のために付与したものにすぎない。ただ句調や語法の合致ないしは類似を保存し維持するため、漢文は読み下さず原文のまま引用した。また参考のための図表を作成したので一覽されたい。

西川如見
（一六四八—一七二四）
命理 性命
形氣 測量
事理 数

向井元升と同門？

西川正休
（一六九三—一七五六）
命理 性命
形氣 測量

『天経或問』を出版

向井元升
窮理 器数

西川如見と同門？

蓋理者數之本也。數者理之驗也。術士長于數。疎于理。堯歛乘除非不精緻。或失天道之正。文士長于理。拙于數。引經拋史非不博雅。亦非天象之真。所謂天學者。不可不備。數与理也。則數理全備。而後得識天学之要。〔虞書曆象俗解〕序——遺書一篇

と如見は論説している。如見の右文に「数理兼到」「数理全備」とあるとあり、《理》と《數》は、対立しつつも統一する。また「術士長于數・疎于理」「文士長于理・拙于數」とあるとあり、術士は《數》について長所があつても《理》において短所があり、逆に文士は《理》において長所があつても《數》において短所がある。術士は科学・技術の学者であつて文士は哲学・倫理の学者であらう。

さて《命理》と《形氣》あるいは《理》と《氣》は、また《理》と《事》としても相互に関係する。如見によれば、古代には《理》について精密で《事》について粗雑であつたが、後世には《事》において精密で《理》において粗雑になった。すなわち《理》と《事》について、

蓋性命道德ノ学ハ理ニシテ上古明カニ末代衰フ天地測量ノ術ハ事ニシテ上古ハ粗ニ末代精シ此故ニ天文ハ事ニシテ末代漸ク精密ニ至レル者也〔天文義論〕卷上——遺書二篇七頁

と如見は記述している。こうして如見は、二種の天学としての《命理》と《形氣》、《理》と《氣》、《理》と《數》、《理》と《事》を分析してかつ綜合した。すなわち哲学と科学、本質と現象の二面を対立させかつその両者を統一したのである。

さて如見は、こうした《命理》と《形氣》の二種の天学をめぐ

り、古代と近世、東洋と西洋をどのように比較・対照しただろうか？ 如見によれば、古代の聖人はすでにこの《命理》の天学と《形氣》の天学を綜合し統一していた。⁽²⁾ すなわち中国の聖人の政治・経済について、

伏羲氏仰テ形氣ノ天ヲ觀察シ玉ヒ始テ卦ヲ画シテ命理至妙ノ天ヲ示シ人道ヲ立玉ヒ是レ帝王ノ重事治教ノ始メ人倫日用ノ要領天学ノ原始ナリ〔天文義論〕卷上——遺書二篇二頁

と如見は論説している。しかるに如見によれば、この古代の《命理》と《形氣》の二種の天学も中古になると吉凶・禍福の卜占に交質し腐敗・墮落してしまつた。ところが近世になつてこの《命理》と《形氣》の二種の天学が復活・再生した。この中国に伝統の《命理》と《形氣》の二種の天学を軽視して新來の洋学ばかりを重視する日本の学者を如見は批判する。すなわち、

然ルニ中古以来天学紛失シテ聖人不易ノ正説ヲ不弁妄ニ陰陽禍福ノ事ニ落テ只其聖器有ト云ドモ其理ヲ不察宋儒ニ至テ其理ヲ弁スル事有テ元明ノ間ニ於テ益備レリ然リト云トモ遍ク人ノ知ル事ニ非サルカ故ニ偶戎蛮ノ説ヲ聞テ是ヲ称歎ス況ヤ日本志学ノ徒華ト蛮トノ天学ヲ不弁或ハ村老ノ偏識ヲ認得シテ中華天学ノ明備ナル事ヲ不知〔天文義論〕卷上——遺書二篇九頁

唐土上古ノ天文如斯ニ明察也豈戎蛮ノ説ニ習ハンヤ〔同右〕

と如見は記述している。前述したとおり、如見によれば、天人合一の理氣合一のもとで、《命理》とは陰陽五行の《理》であり、《形氣》とは万物生生の《氣》であつた。宋儒の理学の理氣説は天人説によって、中古に腐敗・墮落してしまつた古代の天学が近世に復活・

再生したのである。すなわち宋学の功績について、

偕テ天文ノ本元ハ易書ニ在テ天文曆易ノ理天人一貫ノ義ヲ窮ムル
事ハ難シトモ少モ是ヲ學ンテ天文曆法ニ合シテ髣髴ヲ察シ驗ン事
可也蓋中華聖人ノ天學中古以來紛失暗晦ナリシヲ宋儒ノ發明セシ
ニ因テ弊說雲ノ如ク開ケシ事最多シ〔天文義論〕卷下——遺書
二篇二四頁〕

と如見は論説している。こうして如見は、宋儒の理学の長所を評価
しているけれども、その短所を批判してもいた。如見が評価した宋
学の長所とは〈命理〉の方面であり、批判した短所とは〈形氣〉の
方面である。すなわち理学の欠点について、

曆家ノ説ハ上古ノ測量ヨリ出テ象數ニ因テ竊測ニ從ヒ宋儒ノ説ハ
測量ニ疎ク理見ニ從テ論説有シ故ナリ：朱子張子程子又ハ邵子ノ
説ト云トモ直チニ天象ヲ測驗シ推歩シテ後ニ可信之……或邵子曰
天ハ理ヲ以テ尽シテ以レ形不レ可レ尽渾天ノ術以レ形尽レ天可乎ト云
云天文学ハ形體ノ天ヲ學ヘル也何ゾ形ヲ以テ尽ス事無ケン〔天文
義論〕卷下——遺書二篇二四・二五頁〕

と如見は記述している。宋儒には理論があってもその検証がない。
観察・実験・計算・測定してはじめて理論を検証するのであ
る。とりわけ《理》によって探究するのであって《形》によって追
求するのではないという邵雍（康節）の天学に右文は反論してい
る。理先氣後ではなく理氣合一のもとで如見の天学は、《理》の探
究と《形》の追求を綜合し統一したのである。

以上のような如見の〈命理〉と〈形氣〉の二種の天学についての
学説を息子の正休も著作のなかで祖述している。すなわち〈命理〉

と〈形氣〉について、

夫レ天学ニ二義アリ。命理ノ天学ト。形氣ノ天学トナリ。性命五
常ノ道理ヲ窮ル。是レ命理ノ天学也。日月五星ノ運行測量ヲ修
ル。是レ形氣ノ天学也。命理ト形氣ト本二ツニ非ズ。〔天学初学
問答〕——遺書十一篇一頁〕

此ノ如キノ三才一貫ヲ窮ル。是ヲ命理ノ天学ト云。又日月五星ノ
運行ヲ推歩測量シテ。四時ヲ定メ。時ヲ授ケ。或ハ世界ノ万国
ニ行舟シ。或ハ我国山川ノ地理ヲ窮ル。是ヲ形氣ノ天学ト云。

（同右二頁）

と正休も論説している。正休の右文に「性命五常」「推歩測量」と
あるのは、如見の前引に「性命道德」「陰陽五行」「天地測量」「測
驗シ推歩シ」とあったのと主旨が一致するものである。また正休の右
文に「三才一貫」とあるのは、如見の前引に「天人一貫」とあった
のと趣意が近似するものである。如見とともに正休にとっても〈命
理〉は陰陽五行の《理》であり、〈形氣〉は万物生生の《氣》であ
った。天人合一・理氣合一のもとで、この陰陽五行の《理》と万物
生生の《氣》は、《天》と《人》とともに、対立しつつも統一する。
こうして如見とともに正休においても、理氣合一と天人合一は、密
接に結合していた。すなわち、

形氣ナケレバ命理モナク。命理ナケレバ。形氣モナシ。天地形体
アルガ故ニ。理ト氣ト。形体ノ中ニ具リ。人間形体アルガ故ニ。
人氣ト心理ト。形体ノ中ニ具リ。万物形質アルガ故ニ。氣味ト功
能ト。形質ノ中ニ在テ。理氣形ノ三者ハ相離レズ。〔天学初学
問答〕——遺書十一篇二頁〕

と正休は記述している。こうして正休も如見とともに〈命理〉の天学と〈形氣〉の天学を分析してかつ綜合した。さらには正休も如見とともに、こうした〈命理〉と〈形氣〉の二種の天学をめぐり、古代と近世、東洋と西洋を比較・対照している。如見とともに正休によれば、古代の聖人は、すでに〈命理〉と〈形氣〉の二種の天学を綜合し統一していた。中国の聖人について、

問。堯舜ハ形氣ノ天ヲ述ベ。孔子ハ命理ノ天ヲ述ベ玉フニ。堯以前ノ聖人モ。天学ヲ述ベ玉ヘル乎。曰。：聖人孰レカ。三才形氣命理ヲ論ゼザランヤ。(『天学初学問答』——遺書十一篇三頁)

と正休は論説している。正休の右文に「三才形氣命理」とあるとお
り、天人合一と理氣合一は密接に結合している。また西洋の天学は
〈形氣〉に長所があつても〈命理〉に短所があると正休は批判する。
すなわち、

君子ハ天学ヲ以テ。道德性命ノ理ヲ窮メ。紅毛ハ天学ヲ以テ。不
仁貧欲ノ理ヲ窮ル乎。咨嗟惜ヒ哉。紅毛ハ形氣ノ天学ニ達シテ。
何ゾ命理ノ天学ヲ知ザルヤ。(『天学初学問答』——遺書十一篇三
頁)

と正休は記述している。こうして如見・正休の西川父子は、〈命理〉
と〈形氣〉の二種の天学を綜合し統一しようとした。天人合一と理
氣合一は、西川父子の儒学思想の礎石と支柱であった。この西川父
子の二種の天学は、『大学』から宋学へと伝統が継承した格物致知・
居敬窮理といった儒学の教義に系譜となつて接続している。すなわ
ち

私ニ按スルニ天文ハ曆易ノ形体ニシテ易ハ天文ノ理曆ハ天文ノ用

也是則致知格物ノ主本学者是ヲ忽ニスベケン哉(『天文義論』卷上
——遺書二篇二頁)

と如見が論説しているし、

或初学問テ曰ク。天学ヲ習得テ。何ノ用有ル乎。答曰ク。天学ヲ
習得テハ。大略天地ノ理ヲ窮ル也。聖人ノ道ハ格物ノ理ヲ窮ルコ
ト。天地ノ理ヲ窮ルヨリ大ナルハナシ。(『天学初学問答』——遺
書十一篇一頁)

と正休も記述している。ところで如見に儒学を教授したのは、日本
の朱子学派の木下順庵の門下の南部草寿であった。この草寿がじつ
は〈形体〉の天と〈靈神〉の天を分析し綜合していた。すなわち
〈形体〉の天と〈靈神〉の天について、

今此ノ天ト云ハ目前形体ノ天ニハアラス。幽冥不測靈神アル処ノ
地。一切品物ノ會祖也。：若シ人身ヲ以テタトヘハ。一身ノ中。
一切ノ聞事ヲ耳ノ司ドリ。見事ヲ目ノ司ドルカ如ク。天ニモ亦其
神アリ。各其徳ヲ備ヘ。其事ヲ司ドラシムル者也。(『感応篇俗
解』序文——刈谷市立図書館蔵)

と草寿は論説している。この草寿の〈形体〉の天と〈靈神〉の天
は、如見の〈形氣〉の天学と〈命理〉の天学に系譜となつて接続し
ているかもしれない。⁽⁴⁾

(2) 向井元升・三浦梅園

西川如見の息子正休は、西洋の天学が〈形氣〉に長所があつても
〈命理〉に短所があると批判していたことを前章で記述した。じつ
は『乾坤弁説』の著者の向井元升にもまた同様の論説があつたこと

を当章で論説しよう。ところで元升と如見が系譜において接続して
いるらしきことについては、つとに、

此ヨリ先キ長崎ニ林吉左衛門ト曰ヘル者アリ天文曆算ノ学ニ精シ
正保中耶蘇教徒ノ獄ニ連坐シテ刑セラル其門人ニ小林謙貞向井元
舛：等アリ：如見ノ此学ニ於ケル恐クハ林氏ノ学ニ本ツキテ諸家
ノ説ヲ接衷セル者ナラン（細川潤次郎「西川如見伝」——遺書一
篇三頁）

といった先学の推定がある。

元升は、西洋の學術が〈形器〉に長所があつても〈窮理〉に短所
があると批判する。元升において〈窮理〉とは理氣・陰陽・五行を
対象とするものであり、〈形器〉とは天地の形体・日月の大小・運
行の度数・昼夜の界限を対象とするものであつた。すなわち、

夫。蠶。学。之。為。術。未。曾。知。理。氣。陰。陽。惑。三。五。行。之。說。是。故。其。教。不
道。窮。理。尽。性。之。問。学。徒。就。形。器。之。上。以。論。之。而。已。是。以。天。地
之。形。体。日。月。之。大。小。運。行。之。度。數。昼。夜。之。際。限。雖。稍。詳。而。形。而
上。之。義。則。晦。盲。不。明。否。塞。不。通。遂。執。形。器。之。說。以。為。至。矣。

（『乾坤弁説』——文明源流叢書二卷二頁）

と元升は記述している。元升の右文の〈窮理〉と〈形器〉は、如見
ならびに正休の〈命理〉と〈形氣〉に主旨が一致するものである。
たとえば正休の前引にも「性命五常ノ道理ヲ窮ル。是レ命理ノ天学
也。日月五星ノ運行推歩測量ヲ修ル。是レ形氣ノ天学也」とあつ
た。西洋の學術が〈形器〉に長所があつても〈窮理〉に短所がある
という批判は、『乾坤弁説』の随所に散見するが、そのうちの典型
を追加したい。

如是論は皆蠶学の形器の末に就て工夫をなし、論弁する故に、形
象色相無、工夫不及して異説を立る事、南蠶学之法也、窮理の学
に非ざる故也。夫れ運氣は陰陽五行の化を論ず、南蠶学士は陰陽
を不知、五行の理に味し、本より五運六氣の正説を不知、（『乾坤
弁説』元卷——前掲九頁）

右文のように元升の〈窮理〉は陰陽〓五行の原理〓法則である
し、前引のごとく如見の〈命理〉も陰陽〓五行の原理〓法則であつ
た。こうして元升の〈窮理〉と〈形器〉をめぐる西洋の學術の批判
は、父親の如見を経由しながら正休の〈命理〉と〈形氣〉をめぐる
西洋の天学の批判に系譜において接続してくるのである。

さて西川父子や向井元升は長崎の学者であつたが、おなじく九州
北部の豊後の学者であつた三浦梅園にもまた同様の論説があつたこ
とを以下に記述しよう。梅園の説書メモ「浦子手記」によると如見
の『怪異弁断』を三四歳で、『日本水土考』を三五歳と四七歳で、『華
夷通商考』を六一歳で閲覧している。もともと梅園は、この「浦子
手記」にメモのあるもの以外の如見や正休の作品も読書していたよ
うである。というの、たとえば、

長崎夜話草を按ずるに：（『五月雨抄』上——梅園全集上巻九九
四頁）

との言及があるし、

阿蘭陀の曆は西川如見の教童曆談にあり：（『婦山録』下——同
右一〇八七頁）

との解説もあり、

西川子曰。紅毛曆。正月元日。：（『贅語』陰陽帙下——同右三

七七頁)

との引用もあるからである。最後の一文は、正体の

紅毛ノ正月八日アリ：〔『和漢運氣指南後編』戎蛮等曆説——

遺書一三篇四七頁）

が出典であろう。

梅園は、〈条理〉と〈実測〉を綜合し統一しようとした。〈条理〉

は原理に法則の本質を対象とする哲学であつて、〈実測〉は物質に運

動の現象を対象とする科学であつた。さらには梅園は、西洋の天

文・地理の学術は〈実測〉に長所があるが〈条理〉に短所があると

批判する。すなわち〈条理〉と〈実測〉について、

条理の義は只只実徴を主と仕次次書にて考候事にて愚拙申候事も

天地に合不申候得は僻説にて御座候〔梅田書翰集〕——全集下

巻七八三頁）

夫人は天地を宅として居るものに候へば天地は学者の最先講すべ

き事に御座候尤天文地理天行の推歩は西学入候段で段精密にいた

り候へ共それはそれ切にして天地の条理にいたりては今に徹底と

存ずる人も不承候〔答多賀墨卿〕——同右八三三頁）

天文地理ノ学梵最モ粗ナリ漢ハ寢精シ然レドモ思量模索ニ出デテ

実測ハウトシ；西人ハ意ヲ実測ニ用ユ；蓋天地ニ条理アリ未条理

ヲ得ザレバ実測アリトイヘドモ是ヲ彷彿ニ得テ猶真ニ遠シ〔『備

原』——同右上巻九三〇頁）

と梅園は論説している。こうした梅園の〈条理〉と〈実測〉は、元

升の〈窮理〉と〈形器〉や如見ならびに正体の〈命理〉と〈形氣〉

に趣意が近似するものである。しかるに元升の〈窮理〉が陰陽五行

行を、また如見の〈命理〉も陰陽五行を、また正体の〈命理〉が

性命五行を対象とするものであつたが、梅園の〈条理〉は五行で

はなく陰陽のみを対象とするものであつた。すなわち陰陽につい

て、

今世。実測与推歩漸精。則於知其形。雖熟其形。而未能力

審天地之所。以然者。何邪。以罔於陰陽之故也。〔玄語〕

例旨——全集上巻六頁）

と梅園は記述している。梅園は右文で陰陽を所以と実測・推歩ある

いは《故》と《形》を比較・対照している。（朱子の理学において

《氣》にとつて《理》は、「所以然之故」であるとともに「所当然之

則」であつた）。向井元升が〈窮理〉と〈形器〉をめぐり西洋の天

文・地理を批判したように、また西川正休が〈命理〉と〈形氣〉を

めぐり西洋の天文・地理を批判したごとく、三浦梅園も〈条理〉と

〈実測〉をめぐり西洋の天文・地理を批判した。しかるに梅園が五

六歳で長崎に旅行したとき、通詞の松村翠涯（元綱）が西洋の学術

も結局は〈窮理〉であると解説した。この松村の解説によつて梅園

も西洋の科学は一種の〈窮理〉であると承認して、

松村と西洋の事を語るに因て松村曰西洋の学畢竟窮理の学也務め

て物の性を知るに在り性を知るにて能物を成すといへり此窮理の

字も性の字も宋儒の所謂と同じきに非ざれども西洋の学は能くも

の理を推し極め物の性を尽す〔『帰山録』下——全集上巻一一

〇三頁）

と記録・報告している。〈実測〉には長所があつても〈条理〉には

短所があると西洋の科学を批判していた梅園も、ここでは自説を修

正しているかのようである。ここでは梅園の〈条理〉も宋学の〈窮理〉に系譜において接続している。すなわち、

右いふ如く宋儒窮理の学を唱ひしより今に至ってよる者多し…窮理を務めん事は天地の大觀に於ては一助あるべし〔帰山録〕下

——全集上卷一一〇三頁)

と梅園は論説している。

(3) 物理小識・天経或問

西川如見・正休父子が〈命理〉の天学と〈形氣〉の天学を綜合し統一しようとし、西洋の天文・地理が〈形氣〉に長所があつても〈命理〉に短所があると批判したことを(1)章で前述した。また三浦梅園が〈条理〉と〈実測〉を綜合し統一しようとし、西洋の天文・地理が〈実測〉に長所があつても〈条理〉に短所があると批判したことを(2)章で前述した。じつは清代の『物理小識』(方以智著)と『天経或問』(游子六著)に同様の論説があることを以下に記述しよう。

方以智と游子六の二人は知人であつて、前者は後者の著書のために序文を執筆したし、後者の著書に前者からの引用が多出する。

西川正休は『天経或問』に訓点をつけて出版したし、梅園もまた、その讀書メモ「浦子手記」によれば、『天経或問』を二四歳で、『物理小識』を五七歳で閲覽しており、主著『贅語』にはそれらからの引用が多出する。もっとも陰陽は肯定しても五行を否定する梅園は、たとへば、

明游子六。擲曰。天色在五行之外。青亦非其真体。既説五

行。又説五行之外。不_レ通甚矣。(『贅語』天地帙下——全集上卷三五七頁)

と『天経或問』を批判することもあった。西川正休も『天経或問』について、

今多ク世間ニ流布スル所ノ天文地理ヲ著シタル書ハ。天経或問ノミニテ。此外ニ用ベキ書ナシ。曆書ハ有リト雖モ。總テ曆書ニハ。日月運行ノ數術ノミ記シテ。天地ノ形体ト。天地ノ道理トヲ詳ニセズ。故ニ儒家ノ如キハ。学テ用少シ。天経或問モ弊ヘ多シト雖モ。古今ノ諸説ヲ集メテ篇ヲ成シ。殊ニ天地ノ形体ト道理トヲ大概ニ説ケルガ故ニ。撰ミテ可也。〔天学初学問答〕——遺書十一篇七頁)

と難点があるとしつつも推賞している。正休の右文によれば、『天経或問』は、〈道理〉と〈形体〉を綜合し統一している稀有の名著であつた。この〈道理〉と〈形体〉は、如見ならびに正休の〈命理〉と〈形氣〉にも主旨が一致するものである。如見にも、

近來新渡ノ書ニ論シテ云戎蛮ノ天学測量ノ図器ハ巧術ヲ得タリト云ドモ其義理ヲ弁ズルニ至テハ命辭頗_レ拙シト云云〔天文義論〕卷上——遺書二篇一九頁)

という一文があるが、ここで〈義理〉と〈測量〉は、やはり如見ならびに正休の〈命理〉と〈形氣〉に趣意が近似するものである。しかも右文の「近來新渡」の書物とは、おそらく『天経或問』か『物理小識』のことであるにちがいない。というのも、『天経或問』の序文(これは『物理小識』の著者である方以智が知人の游子六のために執筆した)に、

万曆之時。中土化洽。太西儒來。厚豆合圖。其理頓顯。膠魯見一者。誠以為異。不知其皆聖人之所已言也。特其器數其精。而于通幾之理。命辭頗拙。〔天經或問〕序——遺書十篇六頁〕との一節があるからである。右文の「特其器數其精。而于通幾之理。命辭頗拙。」とあるのは、如見の前引に「戎蛮ノ天学測量図器ハ巧術ヲ得タリト云ドモ其義理ヲ弁ズルニ至テハ命辭頗拙シト云云」とあったのに語調も酷似している。如見の前引によれば、西洋の天学は〈測量〉に長所があつても〈義理〉に短所があつた。以智の右文によれば、やはり西洋の学問は〈器數〉に長所があつても〈通幾〉に短所があつた。『天經或問』の序文では〈通幾〉と〈器數〉といった表象の比較であるが、以智の名著の『物理小識』では〈通幾〉と〈質測〉といった概念の対照となる。この『物理小識』でも、西洋の学問は〈質測〉に長所があつても〈通幾〉に短所がある」と以智は批判する。すなわち、

万曆年間。遠西学入。詳于質測。而拙于言通幾。然而智士推。彼之質測猶未備也。儒者守宰理而已。〔物理小識〕自序〕と以智は論説している。以智の右文に「詳于質測。而拙于言通幾。」とあるのは、やはり以智の前引に「特其器數其精。而于通幾之理。命辭頗拙。」とあったのに主旨が一致するものであり、さらには如見の前引に「戎蛮ノ天学測量図器ハ巧術ヲ得タリト云ドモ其義理ヲ弁ズルニ至テハ命辭頗拙シト云云」とあったのに趣意が近似するものである。

さて以智の名著『物理小識』で〈通幾〉と〈質測〉は、きわめて枢要な範疇であつた。ところで〈通幾〉とはなにか？〈質測〉とは

なにか？ これらの概念を定義して、推而至于不可知。転以可知者揆之。以費知隱。重玄一実。是物物神神之深幾也。寂感之蘊。深究其所自来。是曰通幾。物有其故。実考究之。大而元会。小而草木蠹蟻。類其性情。徼其好惡。推其常变。是曰質測。質測藏通幾者也。〔物理小識〕自序〕

と以智は記述している。以智の右文によれば、〈通幾〉は世界の事物の本質を対象とする哲学であり、〈質測〉は世界の事物の現象を対象とする科学であつた。しかも本質は現象のなかに内在しているし、哲学は科学のなかに内在している。以智の右文で〈通幾〉と〈質測〉は、《隱》と《費》としても相互に関係している。さらには以智の左文で〈通幾〉と〈質測〉が〈性命〉と〈象數〉、《道》と《器》、《理》と《物》としても相互に関係してくる。すなわち、故性命之理。必以象數為徵。未形則無可言。一形則上道下器。分而合者也。…舍物則理亦無所得矣。又何格哉。…或質測。或通幾。不相壞也。〔物理小識〕総論〕

と以智は論説している。こうして以智は、〈通幾〉と〈質測〉、〈性命〉と〈象數〉、《道》と《器》、《隱》と《費》、《理》と《物》の二面を分析してかつその両者を綜合した。すなわち哲学と科学、本質と現象は、対立しつつも統一するのである。《道》と《器》は周易繫辭上伝から、また《隱》と《費》は『中庸』から宋学へと繼承した伝統である。これらは、西川如見・正休父子の〈命理〉と〈形氣〉、向井元升の〈窮理〉と〈器數〉、三浦梅園の〈条理〉と〈実測〉の分析に綜合あるいは対立し統一に系譜において接続している。

以智は自著『物理小識』だけではなく、游芸の名著『天經或問』

のための序文でも〈通幾〉の哲学と〈質測〉の科学を綜合し統一しようとした。すなわち、

愚者答之曰。神無方。而象數其端幾也。準固神之所為也。勿以質測壞通幾。而昧其中理。勿以通幾壞質測。而荒其其事。〔天経或問〕序——遺書十篇六頁)

と以智は記述している。以智の右文によれば、〈質測〉があつても〈通幾〉がなければ〈中理〉に無知となつてしまふし、〈通幾〉があつても〈質測〉がなければ〈実事〉に無知となつてしまふ。

ところで『物理小識』において、『物』と『理』、『器』と『道』の綜合し統一は、『物』と『心』、『天』と『人』の綜合し統一と密接に結合していた。すなわち、

為物不二之至理。隱不可見。質者氣也。微其端幾。不離象數。彼掃器言道也。離費窮隱者偏權也。日月星辰。天懸象數如此。官肢經路。天之表人身也如此。圖書卦策。聖人之昌準約幾如此。無非物也。無非心也。猶二之乎。〔物理小識〕卷一天類——象數理氣(微幾論)

と以智は記述している。以智は右文で「掃器言道」を否定し、「離費窮隱」に反対している。また以智は右文で「無非物也」と主張し「無非心也」と強調している。こうして物理合一と道器合一は、物心合一と天人合一と密接に結合してくるのである。西川如見・正休においても理気合一が天人合一と密接に結合していたことは(1)章で前述したとおりである。

こうして以智は〈通幾〉と〈質測〉を分析しつつそれらを綜合し

ようとしたが、游芸(子六)も〈条理〉と〈象數〉を対立させつつそれらを統一しようとした。〈条理〉は事物の本質であり、〈象數〉は事物の現象であつた。すなわち〈条理〉と〈象數〉について、
然而就氣以格物之質理。萃其所以為氣者。以格物之通理。亦二而一也。費而象數。隱而条理。亦二而一也。若知二在一中。則錯綜變化無不可為者。自非神明。難析至理。〔天経或問〕地之卷四五行——遺書十篇三二頁)

と游芸は記述している。游芸の右文に「亦二而一也」とあるのは、以智の前引に「分而合者也」とあつたのと趣意が近似するものである。また游芸の右文で〈条理〉と〈象數〉は、『隱』と『費』、『理』と『氣』としても相互に關係している。さらには游芸の左文で〈条理〉と〈象數〉は、〈理性〉と〈耳目〉としても相互に關係してゐる。すなわち〈理性〉と〈耳目〉について、

天者群物之租。理性之所由出。其文即猶理性之耳目也。今舍吾耳目之性之理之靈。而漫言耳目。其不為皮相鮮矣。故西儒亦曰。天文格物窮理之首務。旨哉言也。〔天経或問〕地之卷占候——遺書十篇二八頁)

と游芸は論説している。游芸の右文によれば、〈理性〉の思考は事物の深層を認識するものであり、〈耳目〉の感覺は事物の表層を認識するものである。

こうして『物理小識』の〈通幾〉と〈質測〉ならびに『天経或問』の〈条理〉と〈象數〉の綜合し統一は、西川如見・正休父子の〈命理〉と〈形氣〉や向井元升の〈窮理〉と〈器數〉や三浦梅園の〈条理〉と〈実測〉の綜合し統一に主旨が一致するものである。『物

理小識」の論説は、直接に、あるいは『天経或問』を媒介して間接に、如見・正休や梅園の論説に系譜となって接続していたにちがいない。

あとがき

以上に立証したとおり、西川如見・正休父子は〈命理〉の哲学と〈形氣〉の科学を綜合し統一しようとした。『乾坤弁説』で向井元升も〈窮理〉の哲学と〈器數〉の科学を、三浦梅園も〈条理〉の哲学と〈実測〉の科学を綜合し統一しようとした。清代儒学の『物理小識』（方以智著）も〈通幾〉の哲学と〈質測〉の科学を、『天経或問』（游子六著）も〈条理〉の哲学と〈象數〉の科学を綜合し統一しようとした。しかも長崎の如見はおなじく長崎の元升の門人であったとみられ、正休は『天経或問』に訓点をつけて出版したし、豊後の梅園は24歳で『天経或問』を、57歳で『物理小識』を閲覧していたし、方以智と游子六の両者は知人であった。こうして論理のうえでも歴史のうえでも、これらは系譜となって接続してくる。とりわけ西川父子にとって清代儒学の『物理小識』や『天経或問』は、學術の構想の源泉ないしは底流になったにちがいない。

(注)

(1) 如見の天人合一の思想については、拙稿「西川如見の儒学思想」(『日本思想史学』一四号)を参照されたい。

(2) 天文・地理の学者でもあり天人合一の理氣合一の儒者でもあった如見・正休が中国の古代の聖人の天学を手本・模範とし

たのもゆえないことではない。というのも、古代の天学は、自然と人間、哲学と科学の綜合し統一であったからである。すなわち飯島忠夫氏も「古代支那に於ては、天文学はすべての學問を綜合する理論を説くものである。それは哲学でもあり、物理学でもあり、道徳学でもあり、政治学でもあり、宗教でもあり、予言学でもある。故に天文学は諸学の源頭に立つものとも言ひ得る。それは現代の用語としての天文学とは大にその意義を異にしている。」(『天文曆法と陰陽五行説』一八三頁)と叙述している。また如見・正休がとりわけ陰陽・五行を中心・焦点にして中国の聖人の古代の天学を手本・模範としたのもゆえないことではない。というのも、古代の天学は、わけでも陰陽・五行を中心・焦点にして哲学と科学、自然と人間を綜合し統一したからである。すなわち飯島氏もまた「吾人が支那の古代思想を検討するとき、其の全部を蔽ふところの哲学は陰陽五行の説であることを発見する。此の哲学は希臘の古代の哲学と同じ様に物理学と分れて居ない。それは宇宙生成の理論であり、人間道徳の原理である。……天体曆數より宗教・倫理・政治・兵法・産業・芸術に至るまで陰陽五行説と提携して居ないものは一つもないのである。」(同上二一六頁)と叙述している。

(3) 正休が西洋の天学は〈形氣〉に長所があっても〈命理〉に短所があると批判したこともゆえないことではない。というのも、十六世紀以後に流入した洋学は、科学と宗教であって、近代の哲学は、ほとんど渡来しなかったからである。天地創造と

靈魂不滅を中心・焦点とする耶蘇の教理は、朱子学派の儒者と
しての如見・正休にとつては、〈命理〉について無知であると
批判せざるをえなかつたろう。たとえばイタリアのシドッチを
訊問した調書ともいふべき新井白石の『西洋紀聞』にも、

凡そ其人博覽強記にして、彼方多学の人と聞えし、天文地理
の事に至ては、企及ぶべしとも覺えず。また謹愷にして、よ
く小善にも服する所ありき。其教法を説くに至ては、一言の
道にちかき所もあらず、智愚たちまちに地を易へて、二人の
言を聞くに似たり。ここに知ぬ、彼方の学のごときは、ただ
其形と器とに精しき事を、所謂形而下なるもののみを知り
て、形而上なるものは、いまだあづかり聞かず。さらば、天
地のごときも、これを造れるものありといふ事、怪しむには
たらず。『西洋紀聞』上巻——日本思想大系35(171—191頁)
という有名な言葉があるが、白石の右文の〈形而上〉と〈形而下〉
といった周易繫辭上伝から宋学へと継承された伝統は、如
見・正休の〈命理〉と〈形氣〉に系譜として接続するものであ
る。

(4) 南部草寿のこの《神》の概念は、門人の如見の《神》の表
象に系譜となつて接続しているようである。たとへば、

火ハ至神ナル故也…都テ万物ノ中ニ火不_レ有者ナシ…能ク其
神万物ニ蔵レテ而モ能ク物ヲ生ス…世界ノ生靈此ノ神ノ所造
『兩儀集説』卷七——遺書十八篇(二二頁)

と如見も記述している。

(5) 内田秀雄氏も「併せて、天文、地曆教の学を林吉左衛門の

門弟なる小林謙貞(義信)、沢野忠庵の『乾坤弁説』の著述に
関係した向井元升などに就いて学んだ。」「西川如見と其の地
理学」——『史林』二四号四〇頁)と叙述している。

(6) 明代に洋学が中国と日本に流入して以来、とりわけ清代と
もなると、儒学にとつて、哲学と科学の綜合_二統一は、宋代よ
りはるかに重大な問題にならざるをえなかつたろう。たとえば
徂徠学派の太宰春台も性理学と天主教について、

明の万曆年中に、歐羅巴国より利瑪竇という者入朝して、天
主教を説しに、其説程朱の性理学に似て、其精微なること性
理学に超たる故に、性理学の学者、己が道を捨て、天主教を
受たる者多し。天経或問を作れる游芸、通雅を作れる方以智
等、すなはち其人なり、…明の末に呉廷翰といふ者、吉齋漫
録、甕記、續記などいふ書を著して、程朱の道を闢きしは、
豪傑なり。『聖学問答』卷下——日本倫理彙編六卷二八五
頁)

と中国の情勢を日本で解説している。春台の右文も、やはり
『物理小説』とならぶ『通雅』(方以智者)と『天経或問』(游
子六著)を二大代表として特筆している。また春台の右文の
『吉齋漫録』(呉廷翰著)と西川如見の儒学思想が天人論_二理氣
説において一致ないしは近似していることを前掲拙稿で立証し
たので参照されたい。

宋学の〈格物致知〉や〈居敬窮理〉を源泉ないしは底流とし
つつ、明代に流入した洋学を媒介にしての清代儒学や西川父子
の哲学と科学の綜合_二統一は、やがてのちの中西用や和魂洋

才といった標語の先駆となろう。

(7) 『物理小識』や『天経或問』と三浦梅園については、小川晴久氏「三浦梅園研究——その一——梅園の条理学について」、『思想の研究』二号)「方以智の自然哲学『通幾』とその構造——三浦梅園の条理学との関連で——」(『学習院高等科研究紀要』四号)や高橋正和氏『三浦梅園の思想』Ⅱ章「三浦梅園と中国思想」といった先学の研究がある。拙稿「三浦梅園と明代儒学」(Ⅱ)、『倫理思想研究』五号)も参照されたい。

(やなぎさわ・みなみ 群馬工業高等専門学校助教授)